

湯澤規子著 (角川書店、2023年)

焼き芋とドーナツ 日米シスターフッド交流秘史

土屋 匠平*

本書は19世紀後半から20世紀の日本と19世紀初頭から20世紀のアメリカ合衆国(以下、米国)における女性たちの時間と場所を超えた「シスターフッド」を、「日常史」として〈食〉に着目し描き出すことを目的としている。筆者湯澤が愛知県一宮市の毛織物工場の女性労働者への調査を通じた高井としを著『わたしの「女工哀史」』(1980)と出会ったことが本書の出発点である。従来の女性労働史上の「正史」『女工哀史』(1925)の著者は高井(1902-83)の内縁の夫、細井和喜蔵(1897-1925)であり、その出版の約半世紀後に高井は女工としての経験を自らの筆により世に放ったのである。湯澤は、高井をはじめとする女工たちの生活と労働について「『わたし』という主語の獲得」(13頁)プロセスを描き出そうとした。『女工哀史』に関する先行研究は、著者が男性のため女性の多様な声が捨象され、男性視点で産業革命期の女性労働者の犠牲者イメージが強調されたことを問題視しており、湯澤は同じ問題意識を引き継いでいる。

本書が先行研究と異なる点は、「日常茶飯」(17頁)という枠組みを用いて、米国を先進モデルと定置しない日米比較・関係(「交流」)史(26頁)を目指したことにある。「日常茶飯」とは、育児や掃除、調理などと名付けられていない「取るに足らない」日常の行為を指す(18-19頁)。「茶飯」に着目する意図は、主食や三食を対象としてきた従来の〈食〉の歴史研究では見落とされてきた間食や喫茶などの食と食の「あいだ」(20頁)に意味を見い出すことにある。日常のありふれた合間にこそ「等身大の女性たちの日々や生身の人間としての姿」(17頁)が立ち現れるという筆者の視座は新たな歴史研究の扉を開く可能性があるだろう。

本書は日・米の二部構成で全八章からなる。第一章は、高井が10歳で岐阜県から(細井と出会う)東京市に移住し工場で働き始める様子を通し

て、産業革命期の急速な都市化と労働者の生活空間を描く。『女工哀史』では女性労働者たちが暮らす寄宿舎が「豚小屋」と表現されたが、湯澤は工場の食堂で形成されたシスターフッドに着目し、「個性と人格」を持つ女性たちの生き生きとした姿を描く。ストライキ時の寄宿舎内決起集会では、男性たちが「大文字の」(50頁)主張(労働環境の改善や賃上げ、自由の権利など)をした一方で、高井は壇上で日常の食事改善を訴えた。湯澤は高井の言動を社会に対する「等身大」の抵抗と解釈する(50頁)。

第二章は、20世紀初頭の女性の生活と労働の分離・再編を扱う。従来の女工史観では、資本主義下の過酷な労働環境によって女性労働者は自由を奪われて、分断され、組織的抵抗ができない被害者として捉えられてきた(63頁)。それに対して筆者は、女性労働者が賃金を獲得して集団生活の中で胃袋を満たしながら日常生活世界での喜怒哀楽の共有を通して、主体的に自由や権利を主張し、抵抗する側面を明らかにする。

第三章は、富山湾の魚津での「民衆暴動」としての「米騒動」の歴史観をジェンダーの視点から批判的に再考する。実際は「騒動」ではなく、「話し合いで済んだ」女性たちの嘆願であり(104頁)、その背景には魚津に長く根付いていた女性主体の社会運動と「女性たちの自治圏」(114頁他)が存在していた。しかし「騒動」との新聞報道が男性労働者を扇動し、各地での暴動に発展した。

第四章では、日本で女性労働者によるストライキが単発的な運動に留まった要因は、20世紀以降の女子教育の「挫折」(132頁)にあると説明される。明治前期の日米間女子教育思想の交流によって、「わたし」の主語の獲得を促す新しい女子教育の胎動がみられたが、明治中期以降には良妻賢母論の台頭によってそれが下火になったと論じら

* 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員(DC)

れる。

米国編に入る第五章では、17～18世紀の女性史を概観した上で、19世紀に女性作家が共和国の母思想(178頁)などの既存の女性像に囚われない「わたし」の生き方を発信し、作品を通じて「わたしたち」の共感が生まれるありようが論じられる。

第六章は、マサチューセッツ州ローウェルの紡織工場の女性労働者による出版活動と自己表現から彼女たちの「織機の間の知性」(209頁他)に焦点を当てる。寄宿舎の女性労働者の余暇活動(講義や展覧会、図書館での読書会や作文サークル、雑誌・新聞の講読など)を通じた「自己修養」の実践と女性同士の連帯や社交の様子が描かれる。ローウェルの工場で働いていたルーシー・ラーコムが残した詩では、工場の窓に貼られた新聞の切り抜きが「窓の宝石」と表現されていたことから、彼女たち特有の感性と工場内で文章を読む意欲に満ちていた様子を見出している(231頁)。

第七章は、パッチワークキルトを通して社会・政治的発信をした19世紀の西部開拓時代の女性たちを取り上げている。男性同様の労働が女性に求められる過酷な開拓の暮らしのなかで、キルト制作を通して、女性たちは心理的な癒しを得たり、新しく建てた家に彩りを与えたりしていた。開拓の暮らしでは女性間の友情や繋がりが重要であり、集団での縫製作業は女性間のコミュニティ形成に役立ち、奴隷解放運動などの社会運動や慈善活動で重要な役割を果たしたと筆者は指摘する。

第八章では、1871年にマサチューセッツ工科大学に初めて入学した女性で、学校給食制度や家政学の基礎を築いたエレン・スワロウ・リチャーズ(1842-1911)の個人史と、彼女の理念や実践を継承したボストンの女性組織WEIU (Women's Educational and Industrial Union) による都市の女性の移民や労働者への食・栄養調査や教育、支援活動が紹介される。WEIUは労働者階級と中産階級の女性たちによって組織・運営されており、筆者はそこに階級を超えた「シスターフッド」(313頁)を見い出している。

以下では全体的な意義と批判を述べる。各章の概説で見てきたように、これまで見過ごされてきた「日常茶飯」を通して女性たちの感情や経験、声を掘り上げ、過酷な労働環境下でも彼女たちが「わたし」という主語を用いて主体的に生きた様子を照射しようとした本書のアプローチは重要である。同分野では、生活思想に着目した女性史研究者の天野正子が、女性たちの個別的多様な生活経験や思想を内在・主体的に理解する方法を「ロウ・アングル」からのフェミニズムの視座としたが、本書もこのような流れの生活史の事例研究として共鳴するところがありそうだ¹。

その一方で、女性労働運動に関して日本は米国ほど盛んではなく、その要因は新しい女子教育の「挫折」にあるとされている点の実証が不十分であると言わざるを得ない。例えば、女性史の視点から日本の女子教育を研究してきた小山静子は、良妻賢母思想の啓蒙や再生産だけではない女子教育の史的理解の可能性を示している²。当時の女子教育を「挫折」と断定する前に、日常茶飯のリアリティを描き出すという本書の強みを活かして、当時の教育を受けた女性たちの「等身大の」声や経験をもとにした史料による精緻な分析や考察があってもよかったのではないか。

前著『胃袋の近代』(2018)で、筆者は〈食〉からの日常史を先駆的に展開し、新たな社会史研究の枠組みを提示し、歴史研究にインパクトを与えた。本書はそうした研究の系譜の上にありながらも、一般読者にも分かりやすく、女性労働の現代的問題にも接続できるように書かれている。読者は本書で登場する日米の有名無名の女性たちに共感し、「わたし」と対話し、時代を超えた「わたしたち」のシスターフッドを感じることができだろう。

注

- 1 天野正子, 1997, 『フェミニズムのイズムを超えて——女たちの時代経験』岩波書店。
- 2 小山静子, 2023, 『高等女学校と女性の近代』勁草書房。